

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

これが魔王の日常です!!

【作者名】

柳葉 ししゃも

【あらすじ】

どこにでもありそうな町のどこでしか見れそうにない話。

夕日が沈む街に耳を澄ませば聞こえるはず・・・

2次元という世界を支配しようとする魔王の声が・・・

これは『非日常による非日常な日常の話』

非現実のプロローグ

この街に朝日が昇る。

冬の冷たい空気がほんのり暖かくなり目覚める。

今日も相変わらず寒い。

布団という神から授けられた羽衣をとり冷え切った部屋へ出るか、
出ないかで、

数十分の時が過ぎた後、朝食の買い物のことを思い出し、
ため息混じりに神から授けられた羽衣をとった。

身支度を早めにすまし朝の街へと出る。

もうすでに外はかなり明るくなっていた。

急いでいて時計を忘れていたが、おそらくもう7時ぐらいだろう。

白い息を吐きながら、足早に商店街へと向かう。

商店街の道のわきにはシャッターを開け出す人々がちらほらと見えだした。

私のすぐとなりを服を着込んで余裕の表情で駅に向かうサラリーマンや、

友人としゃべりながら歩く女子高生が通り過ぎる。

もうすぐ、目的の小さな商店につきかけたときに、
ほとんど鳴らなかった携帯のバイブ音が流れる。

目的の前で邪魔された苛立ちを抑えながら、

「スマートフォン」と呼ばれている携帯を取ると、

家の番号が画面に表示されていた。

家には私を含め2人しかいないから、誰が電話してきたのかは、すぐに分かった。

面倒だったが、出ないわけにもいかず、『通話』と表示されているところを押す。

すると、やけにひょうきんとした声が携帯から流れ出した。

「あ、もしもし、噂のあの人はですよ、今どこにいます？」

いらつづく。

普段は起こらない私だが、さすがにイラッときた。

その影響か、少しトーンを落として、

「噂にすらなっていないません。そもそも、あの人が誰です。今は商店街にいますよ。」

簡潔に言葉を伝えると、電話から予想外な言葉が流れた。

「なんで商店街にいるのさ？」

この人は記憶力もないのか。昨日あんたがしゃべったんだぞ。そんな事を頭に浮かべながら、声を荒げる。

「あんたが朝食の買い出しに行っただけってこと言ったでしょうが!!」

「・・・毎日このような感じなんですよ。」

「いや、私は毎日怒っていませんがね・・・」